

[原著論文：査読付]

## 李卓吾批評本『西廂記』とその日本伝来

黄 冬柏\*

### Li Zhuowu (李卓吾) Critical Edition of “Xixiangji (西廂記)” and its Introduction to Japan

Dongbai HUANG\*

#### Abstract

This paper is studied with an investigation about the feature of the Li Zhuowu (李卓吾) Critical Books in Japan and the historical background transmitted to Japan.

“Li Zhuowu Xiansheng Piping Beixixiangji (李卓吾先生批評北西廂記)”, owned by Kunaicho Shoryobu (宮内庁書陵部), and “Li Zhuowu Xiansheng Piping Xixiangji (李卓吾先生批評西廂記)”・“Li Zhuowu Piping Hexiang Beixixiangji (李卓吾批評合像北西廂記)”, owned by Tenri Library (天理図書館) were investigated, and these form of the publications and feature of the contents were made clear by adding collection consideration of Chinese relevant literature. Also the process introduced into Japan was considered.

**KEY WORDS :** Chinese Classical Publications (漢籍), Edition (版本), Li Zhuowu (李卓吾), “Xixiangji (西廂記)”

## 1. はじめに

日本へと伝来した豊富な漢籍の中には、度重なる戦乱や為政者による禁書などにより中国本土では既に亡びて伝存しないものが多い。幾多の危機を乗り越え、大切に伝えられた貴重な漢籍は日本の各地で散見される。中国古典戯曲の名作である『西廂記』の版本に限って言えば、国立公文書館内閣文庫をはじめ、宮内庁書陵部及び天理図書館などに十種余りの孤本が確認されている。

そこで本稿は、宮内庁書陵部に所蔵されている容与堂刊『李卓吾先生批評北西廂記』、天理図書館に所蔵されている三槐堂刊『李卓吾先生批評西廂記』の実見調査を実施し、関連文献との比較考察を加えることによって、二種の李卓吾批評本『西廂記』の特徴を明らかにしたい。また、これらの版本の旧蔵者である徳山毛利家と千葉鋳蔵・塩谷温の漢籍蒐集についても、近世日本における中国古典の受容という視点から、当時の伝来された経緯及び受容の実態を探ってみたい。

## 2. 容与堂刊『李卓吾先生批評北西廂記』について

現存する五十種あまりの明刊本『西廂記』の中で、李卓吾<sup>1)</sup>の名義で刊行した批評本は七種で、そのうち単評本が五種と合評本が二種ある。それぞれ以下の通りである。

『李卓吾先生批評北西廂記』二卷 万曆三十八年容与堂刊 宮内庁書陵部蔵

『重校北西廂記』二卷 万曆年間三槐堂刊 天理図書館蔵

『李卓吾批評合像北西廂記』二卷 万曆年間游敬泉刊 天理図書館蔵

『李卓吾先生批評西廂記』二卷 万曆年間 潭陽劉應襲刊 美国伯克萊加州大学東亞図書館蔵

『李卓吾先生批點西廂記真本』二卷 崇禎十三年天章閣醉香主人刊 中国国家図書館蔵

『元本出相北西廂記』二卷 李卓吾王世貞評 万曆三十八年起鳳館刊 天理図書館蔵

『三先生合評元本北西廂』五卷 湯顯祖李卓吾徐渭評 崇禎年間彙錦堂刊 中国国家図書館蔵

宮内庁書陵部に所蔵されている万曆三十八年(1610)虎林容与堂刊行の『李卓吾先生批評北西廂記』(以下「宮内庁本」と略す)は、現存する七種の李卓吾批評本の中で最も古くて影響も大きい刊本である。この刊本は『明刊元雜劇西廂記目録』に孤本として紹介され、ま

た「日本所蔵『西廂記』版本知見録」及び『日藏漢籍善本書録』にも善本として取り上げられ、さらに『西廂記』版本研究の第一人者である蔣星煜(1920～2015)も注目したものの、その版式と内容の特徴及び日本伝来の実態はまだ十分には解明されていない<sup>2)</sup>。

### 2.1 宮内庁本の概況

宮内庁本は二卷(巻上下)、万曆三十八年(1610)夏に虎林容与堂より上梓された。線装二冊、匡廓(25.5×16cm)、四周単辺白口、框連眉欄(22.5×14cm)、正文(20.75×14cm)半葉十行、一行二十二字。科白小字単行低一格、一行二十一字。眉欄(1.75cm)鑄評語(眉批)、小字三字。文中評語(夾批)、細字双行。正文界線上小字評語(傍批)。正文の前に二十枚の挿絵、枚ごとに二葉(一葉の表と裏)、計四十葉、「降雪道人」と題し、「無瑕」が模写し、「黄応光」が刻す。版心に「李卓吾批評西廂記(魚尾)卷之上(下)、葉数(界線)、字数、容與堂」と記す。

第一冊：『李卓吾先生批評北西廂記卷之上目録』、挿絵十枚、図第一葉裏に「黄応光鑄」と落款(第一葉～十一葉)。卷上：首行に「李卓吾先生批評北西廂記卷之上」と題し、第一齣～第十齣(第一葉～五十四葉)。第二冊：『李卓吾先生批評北西廂記卷之下目録』、挿絵十枚、図第八葉表に「庚戌夏日模于吳山/堂 無瑕」と刊記、図第十葉表に「降雪道人」と落款(第一葉～十一葉)。卷下：首行に「李卓吾先生批評北西廂記卷之下」と題し、第十一齣～第二十齣(第一葉～四十七葉)。

『西廂記』は『會真記』『蒲東詩』と一冊になり、『玉合記』二冊と『幽閨記』二冊、及び『紅拂記』一冊を合わせて容与堂合刊本と為す。『玉合記』巻上「玉合記序」の文末に「温陵卓吾李贄撰」と署名し、巻下の挿絵中に「応光」の落款が二箇所ある。『玉合記』と『幽閨記』の巻上及び『紅拂記』正文の次行に「虎林容與堂梓」とあるが、『西廂記』にはこの題署がない。虎林とは杭州城内の地名で、容与堂は万曆の間に戯曲小説の刊行を主とした著名な書坊である。容与堂から刊行された書物は、多く版心あるいは巻端に「容與堂」・「虎林容與堂梓」・「容與堂藏版」などの標識を刻んでおり、刻印が精緻で字体も美しく、明代杭州刻本の代表である<sup>3)</sup>。

宮内庁本は元雜劇の体裁である一本四折、五本二十折ではなく、全劇を二十齣に分けており、その目録は以下の通りである。

○ 李卓吾先生批評北西廂記卷之上目録

第一齣 仙呂佛殿奇逢 第二齣 中呂僧房假遇

- 第三齣 越調牆角聯吟 第四齣 雙調齋壇閑會  
 第五齣 仙呂白馬解圍 第六齣 中呂紅娘請宴  
 第七齣 雙調夫人停婚 第八齣 越調鶯鶯聽琴  
 第九齣 仙呂錦字傳情 第十齣 中呂粧臺窺簡

○ 李卓吾先生批評北西廂記卷之下目録

- 第十一齣 雙調乘夜踰牆 第十二齣 越調倩紅問病  
 第十三齣 仙呂月下佳期 第十四齣 越調堂前巧辯  
 第十五齣 正官長亭送別 第十六齣 雙調草橋驚夢  
 第十七齣 商調泥金報捷 第十八齣 中呂尺素緘愁  
 第十九齣 越調鄭恆求配 第二十齣 雙調衣錦還郷

第二齣の「遇」は「寓」の誤りである。標目の前に「雙調」などの宮調名があるが、本文では表示されていない。標目を万暦七年（1579）金陵胡氏少山堂刊行の『新刻出像釋義大字北西廂』（以下「少山堂本」と略す）と比べると、第二齣の「遇」の誤字の他、第十七齣が少山堂本の「捷報及第」から「泥金報捷」に変わっている以外の違いはない。

宮内庁本は卷上（第一齣～第十齣）と卷下（第十一齣～第二十齣）の前に、それぞれ十枚の挿絵があり、黄応光の刻である。双面連結式という、見開きを全て挿絵とする方式は、齣ごとの情節に対応した叙事画という当時の常套を改めて、本文中の名句を題材とする独立した山水画をもたらした。これらの挿絵は内容との結びつきが密接ではないので、少山堂本などの明刊本のように齣ごとの前に一枚ずつを配置するのではなく、本文の前にまとめて置いてある。卷上の挿絵に題している詩文は以下の通りである。（括弧の中に詩文の出処を表す）

- 図1：閒愁萬種 無語怨東風（第一齣【賞花時】之【幺】篇）  
 図2：雪浪拍長空 天際秋雲捲 竹索纜浮橋 水上蒼龍偃（第一齣【油葫蘆】）  
 図3：寂寂僧房人不到 滿階苔襯落花紅（第一齣【勝葫蘆】後の鶯鶯の科白）  
 図4：乍相逢記不盡嬌模樣 則索手抵着牙兒慢慢的想（第二齣【尾聲】）  
 図5：悶對西廂皓月吟（第三齣張生の上場詩）  
 図6：半天風雨洒松梢（第四齣【駐馬聽】）  
 図7：好句有情憐夜月 落花無語怨東風（第五齣鶯鶯の上場詩）  
 図8：遮遮掩掩穿芳徑 料應小腳兒難行（第三齣【調笑令】）  
 図9：蝶粉輕沾飛絮雪 燕泥香惹落花塵（第五齣【混江龍】）  
 図10：踈竹瀟瀟曲檻中（第八齣【調笑令】）

図第一葉裏の右下に「黄応光鐫」と刻工名が記されている。黄応光は、明の著名な刻工であり、万暦二十年（1592）に新安（今の安徽省歙県）虬村で生まれ、万暦三十五年（1607）に杭州に遷り、杭州で亡くなった。卷下の挿絵に題している詩文は以下の通りである。

- 図1：嫩綠池塘藏睡鴨 淡黃楊柳帶棲鴉（第十一齣【駐馬聽】）  
 図2：執手未登程先問歸期 別酒將傾 未飲心先醉（第十五齣【耍孩兒】）  
 図3：夕陽古道 衰柳長堤（第十五齣【四煞】）  
 図4：禾黍秋風聽馬嘶（第十五齣【一煞】）  
 図5：四圍山色中 一鞭殘照裡（第十五齣【收尾】）  
 図6：望蒲東蕭寺暮雲遮（第十六齣【新水令】）  
 図7：蒼煙迷樹 衰草連天 野渡舟橫（第十七齣【逍遙樂】）  
 図8：春風桃李花開夜（第十八齣【耍孩兒】之【二煞】）  
 図9：夜雨梧桐葉落時（第十八齣【耍孩兒】之【二煞】）  
 図10：聽江聲浩蕩 看山色參差（第十八齣【耍孩兒】之【四煞】）

図第八葉表の「庚戌夏日模于吳山／堂 無瑕」という刊記から、この刊本は万暦三十八年（1610）の夏に刊行されたことが分かる。同じ時期の容与堂刊行『李卓吾先生批評琵琶記』も趙璧（無瑕）が模写し、黄応光が刻す。また、図第十葉表に「降雪道人」との落款がある。

明の中期から中国版画は黄金時代に入ったとされている。書籍版刻においては、高度な技術を持つ徽州（新安）の図刻が最も有名であり、徽州の中ではすぐれた刻工を輩出した虬村黄氏一族をその代表とする。明末にかけて杭州・金陵など、版刻の盛んな近隣各地に画風と技術を広め、黄氏刻工がこの仕事の主導権を握っていた。黄応光は黄氏の第二十六代にあたり、万暦四十年の前後に多数の作品を作っており、この容与堂本と『李卓吾先生批評琵琶記』の他、『重刻訂正元本批點畫意北西廂』『徐文長先生批評北西廂記』『李卓吾先生批評忠義水滸傳』（以上は万暦三十九）、『新校註古本西廂記』（万暦四十一）、『李卓吾先生批評玉合記』『李卓吾先生批評紅拂記』『李卓吾先生批評金印記』（万暦年間）などの刊本をも刻している。黄応光の版画は高度な技術と精巧な構図によって、優雅な人物像や静かで美しい景色が、図中の詩句と互いに引き立て合う境地に達していて、徽州版画の精工秀麗な特徴を十分に發揮している。従って、当時多くの書坊が出版ブランドの確立のため、黄応光に版刻を依頼したが、容与堂の一連の出版はその所産である<sup>4)</sup>。

宮内庁本は前述したように五本二十折ではなく、全劇を二十齣に分けているが、そのためもともと各本にあった五組の「題目」と「正名」がなくなっている。周知のごとく、元雜劇は一本四折で、「題目」と「正名」がそれぞれ一句或いは二句あり、その「正名」から劇名を選ぶのが常である。しかし、明の万暦期には、北曲雜劇が衰退して南曲伝奇が隆盛しており、容与堂本が五本二十折ではなく二十齣に分けるのも、本来の北曲の形式ではなく、当時流行していた南曲の体裁に合わせたものと思われる。

宮内庁本の評点の方式には四種類ある。即ち眉批・傍批・夾批と文末総批である。紙幅の関係で眉批・傍批・夾批の一例ずつと巻上の総批を以下のように挙げる。

眉批：既說祇生得這個小姐，後面不合說歡郎是崔家後代子孫。（第一齣〔夫人駕紅歡郎上云〕）

傍批：不獨你一个。（第一齣〔生引琴童上云〕）

夾批：○有餘不盡無限妙處。（第一齣【賺煞】，前に「○」を付け、曲と区別）

總批：張生也不是個俗人，賞鑒家，賞鑒家。（第一齣）無端一見，瞥爾生情，便打下許多預先帳，卻是無謂，卻是可笑。秀才們窮饑餓想，種種如此，到底做上了，所謂有志者事竟成也。（第二齣）如見，如見，妙甚，妙甚。（第三齣）做好事的看樣。（第四齣）描寫惠明處，令人色壯。（第五齣）文已到自在地步矣。（第六齣）我欲贊一辭也不得。（第七齣）無處不似畫。（第八齣）曲白妙處，盡在紅口中摹索兩家，兩家反不有，實際神矣。（第九齣）嘗言吳道子，顧虎頭只畫得有形象的，至如相思情狀，無形無象，西廂記畫來的逼真，耀耀欲有，吳道子，顧虎頭又退數十舍矣。千古來第一神物，千古來第一神物。（第十齣）又評：白易直，西廂之白能婉。曲易婉，西廂之曲能直。所以不可及，所以不可及。又評：西廂記耶，曲耶，白耶，文章耶。紅娘耶，鶯鶯耶，張生耶。讀之者李卓吾耶，俱不能知也，倘有知之者耶。又評：西廂曲文字如喉中退出來一般，不見有斧鑿痕，筆墨跡也。又評：西廂文字一味以模索為工，如鶯張情事，則從紅口中模索之。老夫人及鶯意中事，則從張口中模索之，且鶯張及老夫人未必實有此事也。的是鏡水花月，神品，神品。（巻上總批）

以上の評語は、李卓吾本人のものか、それとも偽託なのか、学界においてこれまで議論が続いている。呉新雷と朱万曙はこの刊本を含む容与堂初刻五種「李卓吾先生批評」シリーズの信憑性が十分にあると考え<sup>5)</sup>、

蔣星煜もこの刊本が李卓吾の自ら批評したものだと思えた<sup>6)</sup>。一方、黄霖氏は「論容與堂『李卓吾批評西廂記』」の中で、この刊本は李卓吾が自分で書いたものではなく、葉晝が李卓吾の名義を借りて作った偽物だと反論している<sup>7)</sup>。筆者は黄霖の「葉晝偽托説」が最も合理的な論考だとするが、ここではこれ以上論じない。

## 2.2 宮内庁本と徳山毛利家

宮内庁は皇室関係の国家事務、天皇の国事行為である外国大使・公使の接受に関する事務、皇室の儀式に係る事務及び御璽・国璽の保管などを所管する内閣府の機関である。宮内庁書陵部は、皇室関係の文書や資料などの管理と編修、また陵墓の管理を行う宮内庁の内部部局の一つであり、明治十七年（1884）に設置された図書寮と明治十九年（1886）に設置された諸陵寮を統合して昭和二十四年（1949）に誕生した部局である。皇宮に収蔵された文物は名品ばかりで、漢籍も例外ではない。宮内庁書陵部に所蔵の漢籍は宋元の刊本が多く、明清以後の戯曲関係の文献も多数見られ、まさに日本における漢籍の流传を考察する重要な資料の宝庫と言うべきである。

宮内庁本の目録の頁に「徳藩藏書」（白文方印）・「明治二十九年改濟／徳山毛利家藏書／第六百二十五番共八冊」（朱文）及び「圖書寮印」（朱文方印）が押印されているから、もともと江戸時代の徳山藩第三代藩主毛利元次の旧蔵書の一つである。毛利元次（1668～1719）は、文武両道に秀でて明敏で好学の聞こえが高く、文人識者と交流するのを喜んでいて、元次は三代目の徳山藩主になると、学問所を兼ねた遊息の場として棲息堂を建て、その東に書庫を設けて蒐書に励み、その書庫に中国戯曲小説を多数所蔵した<sup>8)</sup>。徳山毛利家の所蔵漢籍は『御書物目録』（毛利元次、1706年）と『毛利元次公所蔵漢籍書目』（上村幸次編著、徳山市立図書館、1965年）及び『宮内廳書陵部所蔵徳山毛利家舊藏漢籍分類目録（稿）』（根ヶ山徹、『山口大學文學會誌』巻七十、2020年3月）などがあり、この宮内庁本もそれらに著録されている。明治二十九年（1896）七月、徳山毛利家当主毛利元功は、蔵書の中から善本一〇八八部・二〇九〇二冊を精選して宮内省図書寮（今の宮内庁書陵部）に献納した。そのうちの漢籍の五六九部には「徳藩藏書」の印記が押されている。

広く「天下秘籍」を収めた毛利元次はどのように漢籍を蒐集したのか。江戸時代の経済発展と文化繁栄を背景に、幕府及び各地の大名は中国の小説と戯曲に興味を持ち、多くの大名・藩主は徳川幕府に倣って学問



所を設立し、徳川家康が設立した紅葉山文庫のように、図書文献を蒐集して個人の文庫を構築し、重要な文献資料を保存した。毛利元次も同様に蒐書し、文庫を設立した。周知のごとく、徳川幕府の鎖国政策により国外との貿易は長崎に限られていた。従って漢籍の購入においても長崎は重要な拠点となっていた。徳川幕府は長崎に「書物改役」という官職を設け、中国から入港した書籍文献の検査を執行し、中国の典籍文献に関する最新の刊行情報を掌握しながら、重要な漢籍を精選して購入した。この経路による明清の典籍の獲得、とりわけ戯曲と小説及び地方志の購入は極めて豊富で、しかも天下の孤本も少なくない。こうした状況を考えると、毛利元次も長崎で宮内庁本を含む「天下秘籍」を購入したのではないかと推測できる。

### 2.3 宮内庁本と中国国家図書館蔵本の比較

傳田章氏は宮内庁本を「孤本」としたが<sup>9)</sup>、管見の及ぶ限り、比較の対象とすべき同題の『李卓吾先生批評北西廂記』は以下の五種がある<sup>10)</sup>。

- ①中国国家図書館蔵本（書號：12420）重裝五冊（以下「国図本」と略す）
- ②上海図書館蔵本（書號：善T340306-07）線裝二冊（以下「上図全本」と略す）
- ③上海図書館蔵本（書號：善859683-84）線裝二冊（以下「上図残本」と略す）
- ④中国社科院文学研究所蔵本（書號：853・557 / 1035-03）線裝一冊（以下「文研所本」と略す）
- ⑤美国国会図書館蔵本（以下「米国会本」と略す）

①国図本は巻下が残るのみで、補写してもなお完本ではない。②上図全本は完本ではあるが、宮内庁本のように、本文と附録の版心下部に「容興堂」の印記がなく、巻上図第一葉裏に「黄应光鐫」の署名もない。一方、巻上図第八葉裏に「陳高洲」と巻下図第十一葉表に「応光」が見える。③上図残本は挿絵が欠如し、目録及び巻下第三十六頁以後は他人が補写したものである。④文研所本は巻上が残るのみで、目録の前に「雑説」（内容は李贄『焚書・雑説』と同じ）及び『李卓吾先生批評會真記』がある。⑤米国会本は付録の『李卓吾先生批評會真記』と『李卓吾先生批評蒲東詩』を欠き、しかも眉批に明らかな誤刻が見られる。

従って、宮内庁本は孤本ではないが、現存する六種の『李卓吾先生批評北西廂記』版本の中で最も完整で、明らかな誤刻も見当たらない善本であると言える。紙幅の関係で、国図本に絞って具体的に宮内庁本と比較してみたい<sup>11)</sup>。

国図本は線裝五冊、巻上第一葉表に「北京圖書館藏」・「四明朱氏敝帚齋藏」・「仰周所寶」・「周越然」・「筍竹主人藏」の朱文方印が押印されていて、もともと著名な蔵書家である周越然（1885～1962）の蔵書であったことが分かる。框連眉欄（22.8×13.9cm）、正文半葉十行、一行二十二字、科白小字單行低一格、每行二十一字、四周單邊白口。版式体裁及び本文の内容は宮内庁本と基本的に同様であるが、版心が「李卓吾批評西廂記（魚尾）卷之上、一（界線）四三三、容興堂」（第一葉裏）となっていて、文字数の表示は宮内庁本（四百三十三）と違い、しかも「容興堂」印記の漏刻が随所に見られる。（宮内庁本は本文と附録の全ての版心下部に「容興堂」が見える）。また巻上の「李卓吾先生批評北西廂記卷之上目録」・挿絵と本文第五十四葉裏、及び巻下の図第二葉（表裏）が欠ける。第十九齣【絡絲娘】から最後まで（第三十九葉表～第四十七葉裏）は全て後世の人が補写したもので、脱落の箇所や脱字が見られる。例えば、第十九齣【絡絲娘】・【收尾】（第三十九葉表）は宮内庁本と比較すると以下の通りである。

（宮）：【絡絲娘】〔紅唱〕你須是鄭相國嫡親舍人，須不是孫飛虎家生的莽軍，喬嘴臉醜軀老死身分，少不得有家難奔。〔恒云〕兀的那小妮子，眼見得受了招安了也。我也不對你說，明日我要娶，我要娶。〔紅云〕……。

【收尾】〔紅唱〕佳人有意郎君俊，我待不嗑來其實怎忍。〔恒云〕你再嗑一聲我聽。

（国）：【絡絲娘】〔紅唱〕佳人有意郎君俊，我待不嗑來其實怎忍。〔恒云〕你再嗑一聲我聽。

国図本は【絡絲娘】と曲牌を掲げた後、【絡絲娘】ではなく【收尾】の曲を載せている。その結果、【絡絲娘】曲及びその後の科白が脱落したばかりか、その眉批（聰明、妙）・傍批（忒毒）・夾批（○既知何必問）及び齣末総批（紅娘為何如此護着張生，疑心，疑心）に至るまで全て脱落してしまっている。

また、第二十齣においても、【攪箏琶】曲後（第四十三葉表）の〔紅云〕の後にそのまま〔鶯長吁云〕の科白を続けており、結果として紅娘の科白が消え去っている。

（宮）：〔生云〕小姐間別無恙。〔鶯云〕先生萬福。〔紅云〕姐姐有言語和他說破。〔鶯長吁云〕待說甚麼的是。

（国）：〔生云〕小姐間別無恙。〔鶯云〕先生萬福。〔紅云〕待說甚麼的是。

この他、全体が補写部分である第二十齣は誤写が多く、いちいち挙げることができない程である。また、その文字が簡略化された俗字になっているのも当然の

ことで、総じてこの国図本は補写されて第二十齣までを備えているものの、完本とは言い難い水準である。

### 3. 三槐堂刊『李卓吾先生批評西廂記』について

天理図書館に所蔵されている万暦間（1573～1620）三槐堂刊行の『重校北西廂記』（以下「三槐堂本」と略す）は、現存する李卓吾の名義で批評した刊本中の孤本である。この三槐堂本は、『明刊元雜劇西廂記目録』に孤本として紹介され、また「日本所蔵『西廂記』版本知見録」及び『日本所蔵稀見中國戲曲文獻叢刊』にも善本として取り上げられたものの、その版式と内容の特徴及び日本伝来の実態はまだ十分には解明されていない<sup>12)</sup>。

#### 3.1 三槐堂本の概況

三槐堂本は二卷（上巻・下巻）、万暦の間に王氏三槐堂より上梓された<sup>13)</sup>。線装二冊（天理図書館/922-133）、匡廓（23×14cm）。四周双辺白口、框連眉欄（20.5×12.5cm）。正文（18.25cm）半葉十行、一行二十六字、科白小字双行。眉欄（2.25 cm）鑄注釈・字音及び評語、小字四字。正文の前に一枚の「鶯鶯遺像」、各齣（第二・四齣を除く）の前に一枚、計十九枚の挿絵があり、第二十齣の挿絵に「次泉刻像」と刻工名が記されている。版心の上方にそれぞれ「西廂記附録」・「西廂記上」「西廂記下」、下方に葉数がある。

第一冊：表紙見返に封面（四周単辺、二行大字題「李卓吾先生/批評西廂記」、中央下部小字「三槐堂藏板」）、「重校北西廂記目次」（1葉）、「重校北西廂記総評」（1葉）、「西廂記附録（版心）」、『錢塘夢』、園林午夢』、『新增西廂別調』、『打破西廂八詠』、『蟾宮曲四首』（第1葉～10葉）。挿絵「鶯鶯遺照」（1葉）。正文上巻、首行に「重校北西廂記上巻」と題し、第一齣～第十齣、挿絵八枚（第二齣と第四齣闕）（第1葉～49葉）。

第二冊：正文下巻、首行に「重校北西廂記下巻」と題し、第十一齣～第二十齣（第1葉～43葉）。眉欄に「重訂正/釋義音/字補遺」と題して随所に意釈と音注を施している（第1葉）。また、第二十齣の挿絵に「次泉/刻像」と方形の刻工名が記されている。無窮会図書館所蔵の『重校北西廂記』（以下「無窮会本」と略す）は、第一齣と第二十齣の挿絵にも「次泉/刻像」と落款している。

第一冊裏表紙見返に「元人之戲曲傳奇中、『西廂』並『琵琶』之二編者、千古之奇作、萬世戲曲之長興。生幼從傳奇好、長而小説家、御身仕思所。巻尾二記。

湖上漁父」、第二冊裏表紙に「湖上擁書樓唐本小説、藏書生吳湘生・湖蝶生認藏之」の識語二則が墨書されている。「湖上漁父」「吳湘生」「湖蝶生」については未詳である。

「三槐堂」は書坊名であり、現存する三槐堂より刊行された刊本はほかにもある。例えば、『王文恪公集』三十六卷（中国国家図書館蔵、万暦二十七年、震沢王氏三槐堂）、『銀五車字義六合備考四明海編』十三卷（内閣文庫蔵、万暦三十七年、書林惺切）、『新鐫徽板音釋評林合像班超投筆記』二卷（台湾大学蔵、久保得二旧蔵、万暦三十八年刊、三槐堂王敬喬）、『新刻名公神斷明鏡公案』七卷（内閣文庫蔵、明刊、王崑源）、『類書纂要』三十三卷（北京大学蔵、清康熙三年、姑蘇三槐堂）、『已山先生古文文集』十卷・『別集』四卷（北京大学蔵、乾隆十七年、吳閩三槐堂王氏）などが確認できる。この三槐堂本『西廂記』がどこの三槐堂により刊行されたのかはさらに考証を要する。

三槐堂本は元雜劇の体裁である一本四折で五本とするのではなく、全体を二十齣（幕）に分けており、その目次は以下の通りである。

#### ○重校北西廂記目次

上巻	第一齣	佛殿奇逢	第二齣	僧寮假館
	第三齣	花陰唱和	第四齣	清醜目成
	第五齣	白馬解圍	第六齣	東閣邀賓
	第七齣	母氏停婚	第八齣	琴心挑引
	第九齣	錦字傳情	第十齣	粧臺窺鏡
下巻	第十一	乘夜踰牆	第十二	倩紅問病
	第十三	月下佳期	第十四	堂前巧辯
	第十五	長亭送別	第十六	草橋驚夢
	第十七	泥金報捷	第十八	尺素緘愁
	第十九	詭謀求配		

以上の如く、一行に三齣目が並んでおり、第二十齣目は次の葉にあるはずだが、原本はこの葉が欠如している。三槐堂本の齣目を内閣文庫に所蔵されている万暦二十六年（1598）繼志齋刊の『重校北西廂記』（以下「繼志齋本」と略す）と比べると、第十齣が「粧臺窺簡」から「粧臺窺鏡」に変わっている以外の違いはない。

#### ○重校北西廂記総評

総評の内容は繼志齋本と同様に、王世貞（1526～1590）が著す『藝苑卮言』から「西廂久為關漢卿撰」と「北曲故當以西廂壓卷」という二節の論評である。王世貞は「後七子」の領袖であり、万暦の文壇に絶大な影響力をもっていたので、書坊は彼の『西廂記』に関する論評を採録している。ただし、三槐堂本の版式は繼志齋本と異なり、眉欄に「碧雲天」、第十五折長

亭送別曲」のような注釈が記されている。

三槐堂本の正文は上下二巻からなっている。前述したように五本二十折ではなく、全劇を二十齣に分け、齣ごとに四文字の標題を付け、また四齣ごとに一組の「正名」があり、それぞれ第一齣、第五齣、第九齣、第十三齣と第十七齣の前に置いてある。

正名 老夫人閑春院 崔鶯鶯燒夜香  
俏紅娘傳好事 張君瑞鬧道場  
(第一齣 佛殿奇逢 …)

正名 張君瑞破賊計 莽和尚生殺心  
小紅娘畫請客 崔鶯鶯夜聽琴  
(第五齣 白馬解圍 …)

正名 老夫人命醫士 崔鶯鶯寄情詩  
俏紅娘問湯藥 張君瑞害相思  
(第九齣 錦字傳情 …)

正名 小紅娘成好事 老夫人問情由  
短長亭樹別酒 草橋店夢鶯鶯  
(第十三齣 月下佳期 …)

正名 小琴童傳捷報 崔鶯鶯寄汗衫  
鄭伯常干捨命 張君瑞慶團圓  
(第十七齣 泥金報捷 …)

継志齋本と比べると、五組の「正名」は全く同様であり、第四齣・第八齣・第十二齣と第十六齣の【絡絲娘煞尾】という曲も削除され、しかもそれぞれの眉欄に同じく「一本有絡絲娘煞尾…今刪去」が注されている(第十六齣無)。継志齋本と異なる箇所は、各齣の末に「釋義」があつて「音字」がないが、下巻の眉欄に「重訂正釋義音字補遺」と題して随所に音注を施している。正文の齣目において、「第十齣東閣邀賓」は「第六齣東閣邀賓」の誤刻である。また、第十齣は目次と同じく「粧臺窺鏡」となるが、第七齣の「杯酒違盟」は目次の「母氏停婚」と相異している。

前述したように元雜劇は一本四折で、「題目」と「正名」がそれぞれ一句或いは二句あり、その「正名」の末句をもって劇名とするのが基本である。三槐堂本が「題目」と「正名」をまとめて四句の「正名」を持つのはその名残であろう。また、三槐堂本を二十齣に分けるのも、本来の北曲の形式ではなく、当時流行していた南曲の体裁に合わせたものと思われる。

評点本として、三槐堂本の封面に「李卓吾先生批評西廂記」と題されているが、評語は多くない。「重校北西廂記総評」を除いて、「眉欄」に多く注釈と字音が記されており、齣後にも「釋義」だけを付けて、評語があまり見られない。李卓吾批評の書物はその当時において極めて人気が高いので、「李卓吾先生批評」

を標榜するのは、明らかに書坊主による営利の手段であろう。

三槐堂本は正文の前に『錢塘夢』、『園林午夢』、『新增西廂別調』、『打破西廂八詠』、『蟾宮曲四首』という五種類の「西廂記附録」を収めている。一方、三槐堂本の五種類十葉分の附録と比べると、継志齋本にまとめられている附録は、六十四葉分に及んで明刊本『西廂記』の中で最も内容豊富なものの一つである。『錢塘夢』、『園林午夢』、『蟾宮曲四首』の他、『会真記』や『重校蒲東珠玉詩』及び『重校北西廂記考証』などがある。出版商が刻印する刊本の核心部分の本文はどの本も大差ないため、附録がセールスポイントとなる。そこで釈義、注音、評語など読者に本文の内容を理解させるための工夫を加え、さらに『西廂記』故事の關係する題詠、詩詞、考証資料なども付け加え、ますます読本としての性質に接近した。これらの附録は、書坊が人々の興味を引こうとして収めたものである。

三槐堂本の挿絵は一葉大の「鶯鶯遺像」一枚と見開き二葉大の十八枚、計十九枚・三十七葉分がある。「鶯鶯遺像」は単面整版式で附録と正文の間に挟まれており、十八枚の挿絵は双面(一葉表裏)連結式で正文の齣ごとに一枚ずつを置いてあるが、第二齣と第四齣を欠落している。第二十齣の挿絵に「次泉／刻像」と方形の刻工名が記されている。

挿絵に関しても、文字を読むばかりではなく「絵」をも見たいという読者の嗜好に合わせ、販路を拡大させるという商業的な意図があつたと思われる。明代における書林は最も繁栄の時期を迎えており、坊刻も例外なく、刊行した小説と戯曲の中に大量な挿絵が附されている。その中には、現存するテキストのうち、最も早く刊行された『西廂記』全本である北京金臺岳家刊本『新刊大字魁本全相參增奇妙注釋西廂記』(学界で「弘治本」と称す)の上図下文式は、その代表的な挿絵である。また、建陽の余象斗刊『新刻按鑑全像批評三国志伝』の上評中図下文式と熊龍峯刊『重刻元本題評音釋西廂記』の単面整版式という版式も見られる。これらの版式は挿絵のスペースが制限されるため、狭くて窮屈な感じが否めない。これらと比べて、三槐堂本の双面連結式では、人物が生き生きとして画面に気品と迫力がある。

### 3.2 三槐堂本と千葉鉞蔵・塩谷温

三槐堂本は千葉鉞蔵の旧蔵、次いで塩谷温の家蔵を経て天理図書館に収めた孤本である。千葉鉞蔵(1870～1938)は、号を掬香、書齋名を擁書樓という。収蔵



した中国古典戯曲や小説に「千葉文庫」という印記がある。青山学院を卒業した後、十年にわたってアメリカとドイツに留学し、イエール大学大学院を修了した千葉鉞蔵は、明治三十年（1897）に帰国すると、早稲田大学文学部で教鞭を執る。欧米留学で培った社会学と倫理学の学術及び語学力を元にして、社会倫理学の研究家、また欧州戯曲の翻訳家として活躍する一方、漢籍の蔵書家としても中国の研究者たちにより広く知られる存在である。『日本東京所見小説書目』の著者である孫楷第（1898～1989）は、中国本土において佚した『鐘伯敬先生批評三国志』・『杏花天』などを千葉鉞蔵の所蔵として記しており、また同じく著名な蔵書家であった馬廉（1893～1935）は、「千葉文庫」にあった通俗小説『幻影』を買い取って中国に持ち帰り、その本は現在北京大学図書館に所蔵している<sup>14)</sup>。

塩谷温（1878～1962）、号は節山、著名な中国古典文学の研究者である。儒家を家学とする家柄の四代目で東京に生まれ、一九〇二年に東京帝国大学漢学科を卒業、大学院で中国文学史を研究し、一九〇六年に母校である東京帝国大学の助教授となる。一九〇六年から二年間半にわたってドイツに留学した後、北京へ赴いて中国語を勉強し、そして長沙にて著名な学者である葉德輝（1864～1927）を師と仰いで『西廂記』・『琵琶記』・『牡丹亭』・『長生殿』などの戯曲名作を学び、一九一二年に帰国すると中国の戯曲・小説の研究を進めた。また、当時に開講した「支那戯曲講義」で教材として主に取り扱われているのは、『西廂記』である。その講義を聴講した芥川龍之介は「支那戯曲講義 塩谷温助教授」というノートを残している<sup>15)</sup>。塩谷温は一九二〇年に論文『元曲の研究』を提出して文学博士号を授与され、同年に教授となる。『西廂記』と『元曲選』の研究に力を入れると同時に、中国古典戯曲と小説の文献を積極的に蒐集した。現在東京大学文学部に所蔵している戯曲文献の多くは、塩谷温が在職した時に購入・抄録されたものである。また、四代に続く漢学者の家系に生まれた者として東京において文献の蒐集を積み重ねた結果、塩谷温が家蔵した戯曲文献は、同時期の他の学者より遥かに豊富である。その家蔵は後に天理図書館に所蔵され、中の戯曲小説文献は六百二十五種類、四千四百冊あまりに上る。塩谷温が収蔵した戯曲文献は、明刊本『西廂記』を限っても三槐堂本のほか、『元本出相北西廂記』二卷（天理図書館蔵、起鳳館刊）、『新校注古本西廂記』六卷（天理図書館蔵、王氏香雪居刊）、『李卓吾批評合像北西廂記』二卷（天理図書館蔵、万曆間游敬泉刊）、『西廂記』五卷（天理図書館・

内閣文庫蔵、天啓間烏程凌氏刊）、『六幻西廂』（天理図書館蔵、崇禎十三年閔氏刊抄本）などがある。

さて、三槐堂本は一体どのように千葉鉞蔵から塩谷温へ渡ったのか。塩谷温の学生で、戯曲小説の収集において第一人者であった長澤規矩也（1902～1980）は、千葉鉞蔵とかねてから交友があつて数度「擁書楼」を訪れ、詳細に彼の蔵書を調査し、昭和七年（1932）に千葉鉞蔵の旧蔵書が散逸した際に汲古閣刊本『水滸記』を購入したことを記している<sup>16)</sup>。この記述及び長澤規矩也との師弟関係から考えると、塩谷温も千葉鉞蔵の旧蔵書が散逸した時期に三槐堂本を手に入れたのではないかと推測できる。

### 3.3 三槐堂本と継志齋本・熊龍峯本の伝承関係

三槐堂本は自ら「李卓吾先生批評」と標榜したが、これは書坊が読者を勧誘するためのパフォーマンスであり、実際には李卓吾批評書の出版ブームになる前に刊行した熊龍峯本・継志齋本と伝承関係があると思われる。『重校北西廂記』と題する刊本は、三槐堂本の他、国内においては、前述した継志齋本と無窮会本がある。また、中国本土においても、社会科学研究院文学研究所の蔵本及び国家図書館所蔵の羅懋登注積本などがある。継志齋本は、『重校北西廂記』版本系統の代表的な版本であり、ほかの刊本に大きな影響を与えている<sup>17)</sup>。三槐堂本と継志齋本の異同について、版式・体裁・本文・題評及び挿絵は基本的に同じであるものの、序文と釈義・注音の有無、附録の増減、及び挿絵の刻工名などにおいて異なる。継志齋本には龍洞山農が著す「刻重校北西廂記序」を載せており、この序文は『西廂記』の評価と民間の流布状況、及び継志齋本の刊刻経緯などについて述べている。三槐堂本はこの序文を欠いており、刊行年及び刊行者も明らかにできない。「重校北西廂記目録」と「重校北西廂記総評」及び本文・評語は、三槐堂本と継志齋本と同一のものであるが、巻構成においては、継志齋本が五卷二十齣の雜劇刊本型に対して、三槐堂本が上下二卷二十齣の伝奇刊本型になっている。一方、国立公文書館内閣文庫に収める万曆二十年（1592）の熊龍峯刊『重刻元本題評音釋西廂記』（以下「熊龍峯本」と略す）は、本文・題評・挿絵・釈義及び附録などにおいて、継志齋本をはじめ、後世の『西廂記』刊本に大きな影響を与えた『西廂記』批評本である<sup>18)</sup>。次の表（一）で熊龍峯本・継志齋本と三槐堂本の本文（科白と曲）における異同を具体的に比較してみる。



表（一）熊龍峯本・繼志齋本・三槐堂本の本文異同表

	熊龍峯本（萬曆 20 年）	繼志齋本（萬曆 26 年）	三槐堂本（萬曆間）
	重刻元本題評音釋西廂記卷上 題目 老夫人閑春院崔鶯鶯燒夜香 正名 小紅娘傳好事張君瑞鬧道場	重校北西廂記一卷 正名 老夫人閑春院崔鶯鶯燒夜香 俏紅娘傳好事張君瑞鬧道場	重校北西廂記上卷 正名 老夫人閑春院崔鶯鶯燒夜香 俏紅娘傳好事張君瑞鬧道場
第 1 齣	（外扮老夫人上白）… 小字鶯鶯，年一十九歲，針指女工，詩詞書算，無不能者。… 又有箇小妮子，是自幼伏侍孩兒的，喚做紅娘。一箇小廝兒，喚做歡郎。… 今日暮春天氣，好生困人。… 你看佛殿上没人燒香呵，和小姐閑散心要一回去來。	（夫人鶯紅歡郎上云）… 小字鶯鶯，年一十九歲，鍼滯女工，詩詞書算，無不能者。… 這小妮子，是自幼伏侍孩兒的，喚做紅娘。這一箇小廝兒，喚做歡郎。… 今日春景天氣，好生困人。紅娘佛殿上没人燒香呵，和姐姐閑散心要一遭去。	（夫人鶯紅歡郎上云）… 小字鶯鶯，年一十九歲，鍼滯女工，詩詞書算，無不能者。… 這小妮子，是自幼伏侍孩兒的，喚做紅娘。這一箇小廝兒，喚做歡郎。… 今日春景天氣，好生困人。紅娘佛殿上没人燒香呵，和姐姐閑散心要一遭去。
	（生引琴童上白）… 先人拜人禮部尚書，不幸五旬之上，因病身亡。… 小生就望歌歌一遭。	（生引琴童上云）… 先人拜人禮部尚書，不幸五旬之上，得病而逝。… 小生就訪哥哥一遭。	（生引琴童上云）… 先人拜人禮部尚書，不幸五旬之上，得病而逝。… 小生就訪哥哥一遭。
	萬金寶劍滅秋水，滿馬春愁壓繡鞍。	正是萬金寶劍滅秋水，滿馬春風壓繡鞍。	正是萬金寶劍滅秋水，滿馬春風壓繡鞍。
	【天下樂】生唱… 滋洛陽千種花，潤梁園萬頃田。張騫也曾泛槎到日月邊。	【天下樂】… 滋洛陽千種花，潤梁園萬頃田。也曾泛槎到日月邊。	【天下樂】… 滋洛陽千種花，潤梁園萬頃田。也曾泛槎到日月邊。
	（生云）… 小二哥你來，我問你，這裡有甚麼閑散心處，名山勝境，福地寶地皆可。	（生云）… 小二哥你來，我問你，這裡有甚麼閑散心處，宮觀寺院，勝境福地皆可。	（生云）… 小二哥你來，我問你，這裡有甚麼閑散心處，宮觀寺院，勝境福地皆可。
第 4 齣	紗窓外定有紅娘報，害相思的饞眼腦。 惟願存的人間壽高，亡化的天上逍遙。	紗窓外定有紅娘報，害相思的饞眼腦。 惟願存在的人間壽高，亡化的天上逍遙。	紗窓外定有紅娘報，害相思的饞眼腦。 惟願存在的人間壽高，亡化的天上逍遙。
第 6 齣	是誰來也？（紅云）是我。他啓朱唇急來答應。 則見他又手忙將禮數迎，我這裡萬福先生。	是誰來也？（紅唱）他啓朱唇急忙答應。 則見他又手忙將禮數迎，我這裡剛道個萬福先生。	是誰來也？（紅唱）他啓朱唇急忙答應。 則見他又手忙將禮數迎，我這裡剛道個萬福先生。

以上のように、三種刊本の本文は非常に類似している。とりわけ三槐堂本と繼志齋本は殆ど同様であるから、両者には直接的な継承関係があると言ってよかる

う。また、評語においても、三槐堂本は繼志齋本から取る眉批が多く見られる。次の表（二）は第三齣までの類似する眉批をまとめた一覧である。

表（二）熊龍峯本・繼志齋本・三槐堂本の評語（眉批）対照表

	熊龍峯本（萬曆 20 年）	繼志齋本（萬曆 26 年）	三槐堂本（萬曆間）
第 1 齣		「鍼滯」，古「針指」字。	「鍼滯」，古「針指」字。
	「顛不刺」，外方所貢美女名。又，元人以不花爲牛，不刺爲犬。於此義不相涉，亦可以備考。	「顛不刺」，美玉名。又，外方所貢美女名。又，元人以不花爲牛，不刺爲犬。此義不相涉，亦可以備考。	「顛不刺」，美香名。又，外方所貢美女名。又，元人以不花爲牛，不刺爲犬。此義不相涉，亦可以備考。
	「離恨天」，在諸天之上。	「離恨天」，在諸天之上。	「離恨天」，在諸天之上。
第 2 齣	「周方」，猶云周旋方便。	「周方」，猶云周旋方便。	「周方」，猶云周旋方便。
	眼為「瞭老」，今教坊中猶有此語。董解元『傳奇』云「一双瞭老」。	「瞭老」，謂眼也。今教坊中猶有此語。董解元『傳奇』云「一双瞭老」。…	「瞭老」，謂眼也。今教坊中猶有此語。董解元『傳奇』云。
	「演撒」，元時鄉語。「潔郎」，是嘲僧。「沙」字是襯語。「睽」，音梭，邪視曰「睽」。	「演撒」，元時鄉語。「潔郎」，是嘲僧。「沙」字是襯語。「睽」，音梭，邪視曰「睽」。「趁」，音疾。	「演撒」，元時鄉語。「潔郎」，是嘲僧。
	歐陽公詞：「平蕪盡處是春山，行人更在春山外。」	歐陽公詞：「平蕪盡處是春山，行人更在春山外。」	歐陽公詞：「平蕪盡處是春山，行人更在春山外。」
	「傳粉」，何晏故事。韓壽，張敞，阮郎，俱見舊事。	『魏略』：何晏性自喜，動靜粉帛不去手，行步顧影。韓壽事見『世說』。	『魏略』：何晏性自喜，動靜粉帛不去手，行步顧影。
	「沒揣的」，猶云不意中。	「沒揣的」，猶云不意中。	「沒揣的」，猶云不意中。
第 3 齣	則見他又手忙將禮數迎，我這裡萬福先生。 翻上「記不真嬌模樣」句。	則見他又手忙將禮數迎，我這裡剛道個萬福先生。 「比我」句，翻上「記不真嬌模樣」句。	則見他又手忙將禮數迎，我這裡剛道個萬福先生。 「比我」句，翻上「記不真嬌模樣」句。

「埋没」句下字入神。 縹緗貪羨，三復更奇。	「埋没」句下字入神。 元樂府：「葫蘆提憐憐，惺惺的惜惺惺。」	「埋没」句下字入神。 元樂府：「葫蘆提憐憐，惺惺的惜惺惺。」
古人以二分半為一星，「淒涼有四星」，言十分也。舊解：「斗柄雲橫」，掩其三星，故云「四星」。如元人樂府有所謂「愁煩迭萬埃，淒涼有四星」，上無「斗柄雲橫」，當作何解？	古人以二分半為一星，「淒涼有四星」，言十分也。舊解：「斗柄雲橫」，掩其三星，故云「四星」。如元人樂府有所謂「愁煩迭萬埃，淒涼有四星」，上無「斗柄雲橫」，當作何解？	「四星」，古人以二分半為一星，「淒涼有四星」，言十分也。舊解：「斗柄雲橫」，掩其三星，故云「四星」。如元人樂府有所謂「愁煩迭萬埃，淒涼有四星」，上無「斗柄雲橫」，當作何解？

これらの眉批から三者の相違を窺うことができる。本文と同じように、三槐堂本は継志齋本の眉批をかなり採録している。一方、釈義においては、継志齋本は各齣の末に「釋義」がないが、三槐堂本と熊龍峯本は「釋義」と名付けて齣ごとに本文の末に附す。第一齣だけの「釋義」の数量を見ると、熊龍峯本は三十三条があり、三槐堂本は二十一条がある。しかもこの二十一条は三十三条に含まれている。数の多寡はあるとはいえ、内容においては殆ど同様である。「玉人」の解釈に「裴康」とあるのは「嵇康」の誤りで、両刊本も同じである。従って、三槐堂本は直接に熊龍峯本の「釋義」を参照した可能性が非常に高いと思われる。

その他、三種刊本は収録される附録にも異同がある。継志齋本にまとめられている附録は、明刊本『西廂記』の中でも最も内容豊富なものの一つである。『重校北西廂記考証』には六十四則の詩文を収めている。『會真記』を『西廂記』物語の淵源として、読者に『西廂記』の出典を理解させると同時に、小説と戯曲の異なる創作趣旨と結末を比較させることができる。その他、『錢塘夢』・『園林午夢』・『蟾宮曲四首』・『重校蒲東珠玉詩』などの附録は、書坊が人々の興味を引こうとして収めたものである。一方、三槐堂本は『錢塘夢』・『園林午夢』・『新增西廂別調』・『打破西廂八詠』・『蟾宮曲四首』などの五種を収めている。『新增西廂別調』と『打破西廂八詠』が継志齋本にないことから、三槐堂本はまた「釋義」と同じく熊龍峯本の附録を参照して刊刻したと推測できる。

挿絵については、三槐堂本は継志齋本と同じく双葉連結式であるが、熊龍峯本は単面整版式となっている。そのため熊龍峯本の挿絵の幅は三槐堂本と継志齋本の半分であり、三槐堂本と継志齋本の挿絵が横長であるのに対して熊龍峯本は縦長となっている。とはいえ、背景などの点での相違点はあるものの、三者の構図はほぼ一致しており、ともに人物が生き生きとして画面に気品と迫力があり、他本の挿絵に比べると芸術性が高い。

これまで見てきた本文・評語及び釈義・附録・挿絵

の異同をもとに、三種刊本の性格と伝承関係をどう判断すればよいだろうか。上述したように、三槐堂本は継志齋本・熊龍峯本と密接な伝承関係があると思われる。三槐堂本はおもに継志齋本（万暦二十六年）を底本として、そして熊龍峯本（万暦二十年）も参照した可能性が非常に高いと推断した。また継志齋本と比べて誤刻が多く、版式が少し窮屈であり、挿絵の画線もややかたく稚拙であること、「李卓吾先生批評西廂記・三槐堂蔵板」の表紙を加えたことなどを考え合わせると、三槐堂本は恐らく李卓吾が死去（万暦三十年・1602）した後、建陽の書坊による刊刻されたものと思われる。

#### 4. おわりに

本稿では、宮内庁本と三槐堂本の本文・評語及び挿絵などを紹介し、関連刊本との比較考察を通してそれら刊本の異同や特徴を明らかにした。現存する六種の『李卓吾先生批評北西廂記』版本の中で、宮内庁本は最も整美で、明らかな誤刻も見当たらない善本である。江戸時代、幕府及び各地の大名の間に中国の戯曲小説に興味を持つ風習が流行っていた中で、この刊本の旧蔵者である毛利元次は漢籍伝来の主要基地である長崎で戯曲小説や地方志などの「天下秘籍」を購入し、宮内庁本もそのうちの一種であろう。善本である所以はここにあり、『西廂記』版本変遷の歴史における価値は極めて高いと言える。

また、三槐堂本と継志齋本・熊龍峯本は形式から内容まで非常に類似するから、三槐堂本が直接に継志齋本を底本として参照しただけではなく、熊龍峯本も参照した可能性が非常に高いという結論に至った。三槐堂本は漢籍の蔵書家である千葉鉞蔵の旧蔵、次いで塩谷温の架蔵を経て天理図書館に収められた孤本であるが、塩谷温と長澤規矩也・千葉鉞蔵の交友関係から考えると、塩谷温は千葉鉞蔵の旧蔵書が散逸した昭和七年頃に三槐堂本を手に入れたのではないかと推測できる。継志齋本と比べて誤刻が多いとはいえ、継志齋本

に欠落した第十・十二・十四・十九齣の挿絵を備えており、しかも孤本としての三槐堂本は、日本と中国において『西廂記』版本変遷の歴史に重要な役割を果たしている。

## 注

- 1) 李卓吾 (1527 ~ 1602), 名は贇, 号は卓吾, 中国明代の思想家・評論家。李卓吾思想の真髄は童心説にある。「童心」とは偽りのない純真無垢な心, 真心を言う。これは陽明学の「良知」を発展させた先に李卓吾が到達したものである。彼は戯曲や小説にも「童心」の発露を認めて, 詩文と価値を同等のものとして, 『西廂記』・『西遊記』・『水滸伝』を『史記』や『離騷』とならぶ「古今の至文」と評価している。『西廂記』をはじめ, 十数種類にのぼる批評を付け加えた本を書いて, 通俗文学の地位を大いに高めた。
- 2) 傳田章 (1979) 『明刊元雜劇西廂記目録』(汲古書院, 39頁), 黄仕忠 (2006) 「日本所蔵『西廂記』版本知見録」(『戯曲文献研究叢稿』所収, 国家出版社, 186頁), 嚴紹盪 (2007) 『日藏漢籍善本書録』(中華書局, 2042頁), 蔣星煜 (1997) 「據説日本宮内廳書陵部蔵有『李卓吾先生批點西廂記真本』一部, 但非西陵天章閣刊本, 而為容與堂刊本, 不知是否與浙圖所蔵者同一版本?」(『西廂記的文献学研究』上海古籍出版社, 99頁)。
- 3) 容与堂については, 瞿冕良 (2009) 『中国古籍版刻辞典 (増訂本)』(蘇州大学出版社, 748頁) を参照。また, 容与堂の刊行した戯曲と小説については, 上原究一 (2018) 「虎林容与堂の小説・戯曲刊本とその覆刻本について」(『中国古典小説研究の未来—21世紀への回顧と展望—』所収, アジア遊学218・勉誠出版, 96 ~ 107頁) に詳しい。
- 4) 明刊本『西廂記』の挿絵及び徽州版画の特徴などについて, 瀧本弘之・大塚秀高 (2014) 『中国古典文学と挿画文化』(アジア遊学171・勉誠出版) に詳細な論考がある。
- 5) 詳しくは吳新雷 (1996) 『中国戯曲史論』(江蘇教育出版社, 193頁 ~ 195頁) ・朱万曙 (2004) 『明代戯曲評点研究』(安徽教育出版社, 62頁 ~ 69頁) を参照。
- 6) 蔣星煜 (1997) 「李卓吾批本『西廂記』的特徴・真偽與影響」(『西廂記的文献学研究』所収, 上海古籍出版社, 85頁 ~ 100頁)。
- 7) 黄霖 (2002) 「論容與堂本『李卓吾批評北西廂記』」, 『復旦学報』(社会科学版) 2002年第2期。
- 8) 棲息堂については, 伴俊典 (2012) 「江戸期における『水滸記』全訳の成立」(『東方学』第123輯) に詳しい。
- 9) 前注2) 第39頁に「西廂記はおそらく孤本であろう」とある。
- 10) 新型コロナの影響で海外への実見調査を実施できないため, 五種の版本は陳旭躍 (2007) 『現存明刊「西廂記」綜録』(上海古籍出版社) ・米国会図書館ホームページ (<https://www.loc.gov/resource/lcnclscd.2012402323>) 及び影印本などを参照した。
- 11) 国図本は『國家圖書館蔵「西廂記」善本叢刊 (4)』(国家図書館出版社, 2011年) の影印本に拠った。
- 12) 前注2) 56頁, 189頁, 黄仕忠ほか編 (2016) 『日本所蔵稀見中國戯曲文献叢刊』(広西師範大学出版社) 第2輯第19冊, 4頁。
- 13) 本稿の引用した原文及び掲載した写真は天理図書館所蔵『重校北西廂記』に拠るものである。なお, 『日本所蔵稀見中國戯曲文献叢刊』第2輯にも天理図書館本影印本を収録している。
- 14) 千葉鉦蔵の漢籍蔵書及び中国戯曲の研究については, 伴俊典 (2010) 「千葉掬香の蔵書に見る中国戯曲の受容—『水滸記』を中心に—」(『演劇博物館グローバルCOE 紀要演劇映像学2010』第2集, 早稲田大学演劇博物館グローバルCOE プログラム) が詳しい。
- 15) 詳しくは篠崎美生子ほか (2017) 「芥川龍之介聴講ノート『支那戯曲講義 塩谷温助教授』翻刻」(『恵泉女学園大学紀要』第29号, 147頁-180頁) を参照。
- 16) 長澤規矩也 (1961) 「わが蒐書の歴史の一斑—戯曲小説書を中心に」(長澤規矩也編『東京大学東洋文化研究所蔵雙紅堂文庫分類目録』, 東京大学東洋文化研究所)。
- 17) 継志齋本について, 拙稿 (2019) 「内閣文庫所蔵の『重校北西廂記』考」(『中国文学論集』第48号, 九州大学中国文学会) を参照。
- 18) 熊龍峯本について, 拙稿 (2017) 「日本内閣文庫蔵『重刻元本題評音釋西廂記』考」(『中国文学研究』第29輯, 復旦大学中国古代文学研究中心) を参照。また, 『日本所蔵稀見中國戯曲文献叢刊』(黄仕忠等編, 広西師範大学出版社影印本, 2006年) 第1輯に熊龍峯本を収録している。

## 参考文献

- 1) 傳田章 (1979) 『増訂明刊元雜劇西廂記目録』, 汲古書院。



- 2) 黄仕忠 (2011) 『日本所蔵中国戯曲文献研究』, 高等教育出版社.
- 3) 田仲一成 (2020) 『明代江南戯曲研究』, 汲古書院.
- 4) 拙著 (2018) 『東瀛論西廂—「西廂記」流變叢考』, 商務印書館.
- 5) 拙稿 (2020) 「日本成簣堂文庫蔵孤本『西廂記』再考」, 『国際漢学研究通説』(北京大学) 第18期.
- 6) 静永健 (2010) 『漢籍伝来—白樂天の詩歌と日本』, 勉誠出版.

## 〔付記〕

本研究は, JSPS科研費 (JP19K00383基盤研究C「日本所蔵『西廂記』孤本の調査と研究」) の助成を受けたものである。刊本の閲覧・調査にあたっては, 宮内庁書陵部及び天理図書館の資料の複写と掲載のご許可を頂いたことに厚く御礼申し上げる。

Received date 2022年6月27日

Accepted date 2022年7月22日